

博士論文要旨

氏名	大江（伊藤）麻里子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第2号
学位授与年月日	平成14年3月19日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第5条1項の規定による
学位論文題目	伝統的演劇形式を変革するバーナード・ショーのヒロインたち

論文の要旨

本論文の目的は、ジョージ・バーナード・ショー（George Bernard Shaw, 1856-1950）の女性観と彼の採用した演劇形式との関連を探り、ひいてはヒロインたちの性格付けが、伝統的演劇形式を変革する契機をつくっている、と証明することにある。ショーの戯曲と伝統的演劇形式の関係、またはショーのヒロインのみに着目した論文は既にあるが、演劇形式とヒロインとの密接な関連性について論じたものは、まだ発表されていない。

ショーの戯曲は、プロットや、登場人物、舞台設定などにおいて、既存の演劇形式に基づいていることが多く、結末の部分ではその枠組みを変革するのが常である。変革の原因については現在のところ明らかにされていないが、論者は、それがヒロインの性格づけに起因していると推論する。ショーの創造するヒロインは知的で自立心を持っており、自らの才能を活かそうとする欲求が強いために、結婚や財産の獲得といった従来のハッピー・エンドを容易には受け入れないのである。

ヴィクトリア朝においては、娘・妻・母の役割が女性に期待され、経済的ゆとりを示すために労働に従事しないことが求められた。それゆえ、父や夫などの男性に依存せず、一人の人間として振る舞うことは、不道德であるかのように考えられていた。しかし、ヒロインが自分のために生きようと家族を捨てて出て行く、イプセンの『人形の家』に触発されたショーは、当時の理想的女性像からはかけはなれた「女らしくない女」を次々に舞台に登場させることで、広く問題提起を行ったのである。

本論では、初期から中後期にわたるショーの代表的な5作品を取り上げて、ショーが独特の女性観を抱くようになった伝記的背景も考慮しつつ、ヒロイン像と演劇形式の関係を検討している。

第1章においては、ショーの第3作である『ウォレン夫人の職業』（*Mrs Warren's Profession*）を扱う。彼は、当時話題になっていた「新しい女」を描く上で、ウェルメイド・プレイの基本的プロット展開を利用した。しかし、結婚という「大団円」のかわりに「議論」を配置し、ヒロインに社会の貧困についての問題を論じさせた。

第2章では、ショーが英国演劇界で受け入れられ始めた頃の作品、『バーバラ少佐』(Major Barbara)を扱う。この作品の枠組みはメロドラマであるが、ヒロインの社会奉仕精神が熱烈なために、お決まりの勧善懲悪ではなく、問題を含む結末になっている。

第3章は、興行的な大成功を収めた『ピグマリオン』(Pygmalion)について論じる。ヒロインは、並外れた自立心・向上心を持っているので、恋愛を主題とするロマンチック・コメディの演劇形式を土台としてはいても、最後には、恋愛の成就よりも独立を選択する。

第4章では、劇作家自身が代表作と考えている『傷心の家』(Heartbreak House)を扱う。ヒロインが女性と結婚に関する厳しい現実を論じるために、深遠な主題を扱わないはずの笑劇(farce)の枠組みを超えてしまう。既成の演劇形式では表現の限界があるために、ショーは笑劇を変革して、独自のファンタジアの劇世界を創造している。

第5章では、ショーが世界的に認められることとなった作品、『聖女ジャンヌ・ダルク』(St Joan)を扱う。男装して男性と同等に働こうとするヒロインは、19世紀に流行していたスペクタクル的歴史劇の演劇形式では描ききれない。この性別を超越したヒロインの社会との葛藤は、最終的にはファンタジアの劇世界に移行することで、より具体的に表現される。

以上、5作品の検討により、「女らしくない女」であるヒロインたちの性格付けが、既存の演劇形式を変革する契機をつくっている、ということが証明される。初期の頃は、結末のみにおいて既存の演劇形式を変革することに劇作家の注意が向けられる傾向にあったが、次第に枠組み自体を根本的に変化させ、遂には独自の演劇形式を創造するに至ったと結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ジョージ・バーナード・ショーの女性観と演劇形式の関連を探り、ヒロインたちの性格付けが、伝統的演劇形式を変革する契機になっていることを検証せんと試みるものである。ショーの戯曲形式と伝統的演劇形式との関係、またショーのヒロインたちを論じた研究はすでに存在するが、演劇形式とヒロインを関連させて論じたものは未だに発表されていない。

ヒロインを主題に取り上げる理由として、論者は、ショーがイプセンの影響を受けて、女性が積極的に社会に進出すべきだという見解を表明していたこと、また実生活においても一時期そのような女性たちに経済的に依存していたことを挙げている。また、演劇形式にショーが強い関心と知識を有していたことについても、当時のロンドンが商業演劇の未曾有の隆盛期にあったこと、その中で舞台批評家として活躍していたことから立証できるとしている。

本論文は、数あるショーの戯曲のうちから、制作年代とジャンルが異なり、既成の女性観を覆すヒロインが登場し、なおかつ興行的に成功をおさめた5作品に焦点を当て、演劇形式とヒロインとの関係を考察している。

第1章『ウォレン夫人の職業』 ウェルメイド・プレイと「新しい女」では、当時の厳しい

社会環境の中で、売春という「職業」を、下層階級の女性が社会に進出する道を拓く一つの選択肢として肯定的にとらえようとするウォレン夫人と娘との葛藤を通して、ウェルメイド・プレイの「高級娼婦もの」にありがちなセンチメンタリズムとハッピー・エンドを拒絶していると分析する。

第2章「『バーバラ少佐』 メロドラマと救世軍少佐」では、資本主義経済の機構内で、救世軍活動の限界に直面した女主人公が、救世軍よりも父親の従事する武器製造業の方が逆説的な方法で社会福祉に貢献できることを悟り、婚約者とともに父親の工場経営を引き継ぐ決意を固めるまでの過程を描くことにより、メロドラマ特有の善人と悪人の対決という図式を超越していることを強調している。

第3章「『ピグマリオン』 ロマンチック・コメディと階級を上げる女性」では、上流階級の言語と作法の習得により階級差を超えようとする主人公の行動が、ロマンチック・コメディの枠を打ち破っていると論じている。

第4章「『傷心の家』 笑劇と結婚の意義について考える女性」では、第一次大戦の空爆下のロンドンという設定の中で、理性を失って狼狽し、生命さえも失う男性陣とは対照的に、事態に冷静に対処する女性たちを登場させることにより、深刻な状況を扱う際に笑劇の手法を用いたファンタジアという独自の形式を開拓したことに着目している。

第5章「『聖女ジャンヌ・ダルク』 年代記劇とカリスマ的女性」では、1920年のジャンヌ・ダルクの列聖を契機に、この人物をめぐる「神話」を排し、あくまでも個人の才覚と資質により、性差を超越して偉業を成し遂げる過程を描くことによって、当時のスペクタクル的歴史劇の殻を破ったと指摘している。

以上5作品の分析を通して、論者は、ショーの女性観が次第に発展していくとともに、伝統的演劇形式の変革の度合いも増していくことを検証している。ショーが各作品で提起した社会問題の掘り下げ方、それらが現代社会でもつ意義、ヒロインたちの社会的役割を超えた人間としての深みの追求などの点にやや物足りなさが残るが、論者の今後の研究活動に期待すべきものであろう。

当時の「女らしさ」の概念を独自の視点で打破しようとしたショーの意欲を、演劇形式改革という視点から見直そうとした論者は、先行研究をふまえた上で独創性を追求し、明確な文章と論理で、フェミニズム理論に限定されない広い視野から論じている点において、研究者としての資質を十分に満たすものと判断できる。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位論文として合格と判定する。

2002年2月5日

主査 山田由美子

副査 平井 雅子

副査 金城 盛紀